

QUEEN of THE-YOUNG-AT-HEART : Vivienne Westwood

服飾史家の中野香織、ヴィヴィアン・ウエストウッドを論じる

ヤング・ハートの女王

安全ピンをファッションに変え、反権威主義の象徴となったパンクファッションの女王、ヴィヴィアン・ウエストウッドは、いまもファッションの第一線で活躍し、アクティビストとしても声をあげ続ける。反逆の女王は健在だ。

文・中野香織

バンクムーブメント

ヴィヴィアン・ウエストウッドの最新ドキュメンタリー、「Westwood: Punk, Icon, Activist」(原題)が近日、日本でも公開される。監督のローナ・タッカーが3年以上にわたりヴィヴィアンの生活のあらゆる面に密着して撮りあげた力作で、過去2本のヴィヴィアンに関するドキュメンタリーをはるかに凌駕する濃密な作品になっている。

ヴィヴィアン・ウエストウッドという名を聞いて「お財布のブランド」と連想してしまう世代のために少し説明を加えると、今年77歳を迎えたヴィヴィアン・ウエストウッドは、ファッションデザイナーであり、独立した会社の所有者にして経営者であり、時代を挑発する活動家であり、情熱的で率直なパーソナリティで人々の注目を浴び続ける英国文化のアイコンであり、それらすべてを兼ね備えるゆえにイギリスファッション界の女王として君臨する、類いまれなる女性である。

彼女の名が初めて世界にとどろいたのは、1970年代。当時のパートナー(2人目の夫)、マルコム・マクラレンとともにロンドンのキングスロードからバンクムーブメントを起こした。挑発的なメッセージTシャツに安全ピン、チェーンや鉄を多用した装飾、攻撃的なヘアメイクなど、ヴィヴィアンが創るパンク・スタイルは時代の象徴となる。マルコムがプロデュースしたバンド「セックス・ピストルズ」も、過激さゆえに放送禁止になり、放送禁止ゆえにヒットチャートの上位に輝いた。結果、彼女は「パンクの女王」の異名をとる。ちなみに、それ以前のヴィヴィアンは、夫、子供と暮らす美術教師だった。

デイム

1980年代、パンクも商業主義に取り込まれて観光絵葉書のモチーフとなり、マルコムとの関係を解消してからは、本格的に服作りに取り組み、モード界に進出する。批判や嘲笑も多かったが、功績は否定しようもなく、女王陛下から2度も勲章をもらい、男性の「ナイト」に相当する「デイム」の称号を与えられた。90年代には英国の「今年のデザイナー」賞も2年連続で受賞し、2006年に3度目の受賞を果たした。ヴィクトリア&アルバート美術館では大々的な回顧展もおこなわれた。となれば、堂々たる「権威」なのだが、デイム・

ヴィヴィアン・ウエストウッドは決して保守に回らず、行動や発言で世間を騒がせ続け、近年はむしろ環境保護のための活動をしたり、企業の広告・宣伝を批判したり、緑の党を応援したりするエネルギーあふれるアクティビストとしての勇姿がニュースをにぎわしている。70代後半になると、まったく「落ち着く」気配はない。

このたび公開されるドキュメンタリーでは、そんなヴィヴィアンをとりまく生々しい現実が描かれる。2人目の夫、マルコム・マクラレンがヴ



ィヴィアンの成功をねたみ、足を引っ張り続けていたこと。経済状態が一時破綻していたこと。批評家がこきおろし、テレビの聴衆があざ笑い続けてきたこと。コントロールできていない社内事情があること。現在は社会活動に忙しいヴィヴィアンに代わり、3人目の夫であるアンドレアス・クロンターラー(25歳年下で、元教え子)が主にコレクションを担っていること。こんなことまで赤裸々に公表して大丈夫なのかと観ているほうはハラハラする。

同時に、ぬるま湯の安定に決して収まろうとせず、批判や嘲笑は意に介さず、他人や社会のせいにならず、困難から逃げず、不器用に立ち向かいながら自分本位を貫くヴィヴィアンの潔さと若さに、知らず知らず魅了され、勇気づけられていることに気づく。昨年ロンドンコレクションのフロント

中野香織

(株)Kaori Nakano 代表取締役。服飾史家として研究・執筆・講演をするほか、企業のコンサルティング・プロフェッサー(顧問教授)を務める。ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授を歴任。著書に「紳士の名品50」(小学館)、「モードとエロスと資本」(集英社新書)ほか。

ロウで間近に見たヴィヴィアンの姿を思い出す。モデルの一人に肩車されて登場したヴィヴィアンは、思ったよりも小柄だったが、瞬間を最大限に生きている人の歓喜に輝いていた。ヴィヴィアンに感化された観客が大歓声を浴びせる。そんな観客のエネルギーも共に巻き込んで神がかったいくフレッシュなヴィヴィアンに鳥肌が立った。「仕事に歓喜を見出すことは、尽きぬ若さの泉を発見することに等しい」というパウル・バックの言葉を思い出した。

DIY

パンクの始祖、ファッションデザイナー、ビジネスウーマン、アクティビスト、シングルマザー、25歳下の夫をもつ妻。そして一人の女性。たくさんの「顔」をもつヴィヴィアンだが、その行動の芯にある哲学は1970年代から変わらず一貫している。

まずは、Do It Yourself。自分で考え、自分のやり方で行うということ。そして、Destroy to Create。現実に不満があれば、それを破壊し、破壊しながら新しいものを創り出すということ。これからも、彼女は成熟など素知らぬ顔で、その時その時に新しく生まれる自分の感覚に正直に、やりたいことを全部やっていくのだろう。

イアン・ケリーが著したヴィヴィアン・ウエストウッド伝のなかに、ヴィヴィアンのこんな言葉が紹介されている。「私がファッションに携わる唯一の理由は、「conformity(みんなと同じ)」という言葉を撲滅するためよ」。ヘアピンの位置まで「みんなと同じ」リクルートスーツを着て無表情に歩く20歳そこそこの「若者」の集団を目にしたら、ヴィヴィアンにどのような破壊&創作欲が湧いてくるのか、とても興味をそそられる。



「WESTWOOD: PUNK, ICON, ACTIVIST」は2018年内に公開予定。配給: KADOKAWA。

活動家としても精力的に活動しているヴィヴィアンが今季のテーマに選んだのは戦争だ。ミリタリーテイスト、迷彩柄、色などをディテールに落とし込み、コレクションで表現した。

